



共同保育所から乳児院・母子生活支援施設へ そして

赤ちゃんの家さくらんぼ 施設長 栗原 英樹

3つの事業に至った経緯と自らの関わり

「社会福祉法人・犬山福祉会」は、現在、「犬山さくら保育園」、乳児院「赤ちゃんの家さくらんぼ」、母子生活支援施設「キルシェハイム」を運営しています。保育所から始まった子どもの支援は、種別を超えて3つの事業に広がりました。今後は、施設のノウハウを生かして、地域の家庭の子育て支援に取り組みたいと考えています。



1965（昭和40）年に犬山市の父母が立ち上げた保育運動から犬山共同保育所が始まりました。開所当時の定員はたったの10人です。その後1982（昭和57）年に社会福祉法人として認可され、3歳未満児の保育園として長らく運営を続けてきました。その間、30人、40人と、少しずつ定員は増えていったものの、小さな保育園であることには変わりませんでした。そんな法人が、乳児院や母子生活支援施設を運営することになったのは、特定の個人の貢献ももちろんのこと、数多くの先輩方や（今はすでにいない人も含めて）関係者の皆さんの努力によるものと思います。

約20年前に、私が犬山福祉会の伝統に従って、たまたま保護者の1人として理事になり、いきなり議題に上がっていたのは保育園の将来についての経営上の不安と、その対応としての1法人1施設からの転換でした。

母子生活支援施設の委託と乳児院の設立は、ほぼ同時に検討が進められました。途中で母子生活支援施設の話はいったん白紙となり、もう一方の乳児院設立については、当時の役員と職員の有志、そして新たに乳児院設立に集った職員が中心となって具体化され、2005（平成17）年10月に開設するに至りました。その後10年近い時を経て再び母子生活支援施設の委託の話があり、2014（平成26）年から運営委託、2020（令和2）年からは事業を譲渡され、法人の自主事業となりました。

小さな子を持つ親自身のニーズから始まった法人が、社会的なニーズに応じる事業に取り組むにいたったことは大きな転機であったと考えます。私も、どうしてわざわざそんな大変なことをするのかと何人かの先輩に言われましたが、ここまで実施してきたのは、社会問題に関心を向け、現に困難な状況にある人を目の当たりにして、自分たちに何ができるのかを問い続けてきた人たちがいたからだと思います。

各事業で何か取り組まれてきたのか

これまでの当法人の事業を私なりの視点で振り返ってみます。最近は多くの保育園等でも取り組まれているように、近隣の親子が自由に集う子育て広場を長年実施しています。さまざまな親子に利用され、一時





保育の利用や保育園への入所につながる取り組みです。こんな小さな地域であっても、じつにさまざまな家庭環境にある親子がいることが分かります。私は団塊ジュニア世代であり、核家族であり、もともと生活していた地域ではないところで新しく生活を始めた住民の1人です。子育てについては、身近な手本や親族等の助けがあるわけでもなく、すべてが不安ななかで始めるので、保育園の存在はさまざまな面で実にありがたく、本当に支えそのものでした。同じような世代の親子とのつながりもここがなければずっとなかったままかもしれません。家族と地域とのつながりは、保育園を介してできたということは自らの実感でもあります。一方で、つながることが難しい家族もあり、最近はそのような家族が増えてきているようにも思えます。自らそれを求めれば得られるのでしょうか、そもそも求めていなければ誰ともつながることはないですし、どうするのが良いのかも分からないのかもしれない。

乳児院においては、ここ最近は一時的保護入所がほとんどで、急な入退所も多く、アセスメントも不十分なまま引き取りに至るなど、対応を十分検討する間もないと感じます。地域の中で保育所や保健センター等の見守る人々がいればよいのですが、当事者がそのような支援を望んでいない場合は状況を把握することすら困難です。住んでいる地域によっては使える社会資源に差があることも課題だと感じます。児童相談所も日々の対応で精いっぱいでもとてもフォローができる状況にはないでしょう。母子生活支援施設においては、地域のなかで生活することが困難なケースが多いと感じます。支援者は、地域で自立して生活することが困難であると思っても、当事者は早く施設を出たいと言って、準備も不十分なまま退所したようなケースだと、その後の支援は難しく手だても限られてしまいます。

2つの施設を見ていて思うことは、片や親子が離れて生活する施設、片や母子と一緒に暮らす施設ですが、対象となる家族は似たような課題を抱えており、たまたま利用のきっかけが異なるだけなのではということです。母と子が離れなくても、何等かの支援の手があれば一緒に暮らせるケースもあれば、ずっと一緒にい

ても早くそれぞれの人生を歩んだ方がよいのではと思うケースもあります。乳児院も母子生活支援施設も一時的支援の手立てであり、それで十分なケースも多いのですが、ずっと問題を抱えたままのことも多いのが現実です。

もう1つ思うことは、家族・家庭・地域などという言葉は、個人や世代間でのギャップが大きいということです。私の親の世代とも、もちろん大きく様変わりしていますし、自分が子どもの頃の近所の風景を思い浮かべてみても、現在自分が住んでいて子どもたちが生活している地域とも随分異なっています。さらに子どもたちが親になる世代になったら、さらに変わっていることでしょう。そのような中で地域を基盤とした支援がどこまで成立するのか疑問に感じています。このあたりはさらに考察が必要ですが、地域という概念や前提のようなものも、すでに考え直さないといけないのでしょうか。入所している子にとっての家族も、その親にとっての家族も、同様にやはり大きく違うのでしょうか。

これからの取り組みについて

まずは自分たちでできることから始めるしかありません。現にいるその人たちのためにとない知恵をしぼり、今後3つの施設で以下のようなことに取り組もうと考えています。

- ①一時保護の対応と、子どもたちのより安定的な生活の両立
- ②退所後の家庭・里親家庭のための継続的な支援
- ③特定妊婦、精神障害等の困難を抱える母子の支援
- ④近隣地域の子育て家庭の支援

①は、特に乳児院について施設内の居室・グループ分けを工夫し、一時保護が多い状況に対応できるよう検討を進めています。②については、乳児院・母子生活支援施設ともに、退所後のショートステイの利用や、必要に応じての家庭訪問など、いわば実家の両親が子や孫にしてあげているようなお手伝いができるということなのです。③については、特定妊婦等という枠組みに該当する前の状況で、支援できることはないかを考えています。そのためには、市町村やすでに先駆的



に取り組んでいるNPOなどとの連携を図る必要があります。④については、②とも重なるもので、アウトリーチ型の支援を考えており、訪問型の子育て支援の実施や母子保健事業との連携が図れないかと模索しています。これらを実施するために、現在、赤ちゃんの家さくらんぼとキルシェハイムの間には拠点となる建物（仮称センターハウス）を建設し、両施設で共同して支援に取り組めるように準備を進めています。

私の中では未だ漠然としたイメージにすぎませんが「社会みんなで子どもを育てる」ということを次のよ

うに考えています。親だけが子どもを育てるのではありません。親はもちろん、多くの人々の支えがあって子どもは育ち、大人になり、いつか誰かの親になります。親でなくても大人は子どもたちを育てる1人です。親自身も、子どもや周りの方に親として育ててもらっています。

私たちが成しうることはほんのわずかでしょうが、それでも引き継いでくれる誰かのために頑張りましょう。



赤ちゃんの家さくらんぼとキルシェハイム



仮称センターハウス

